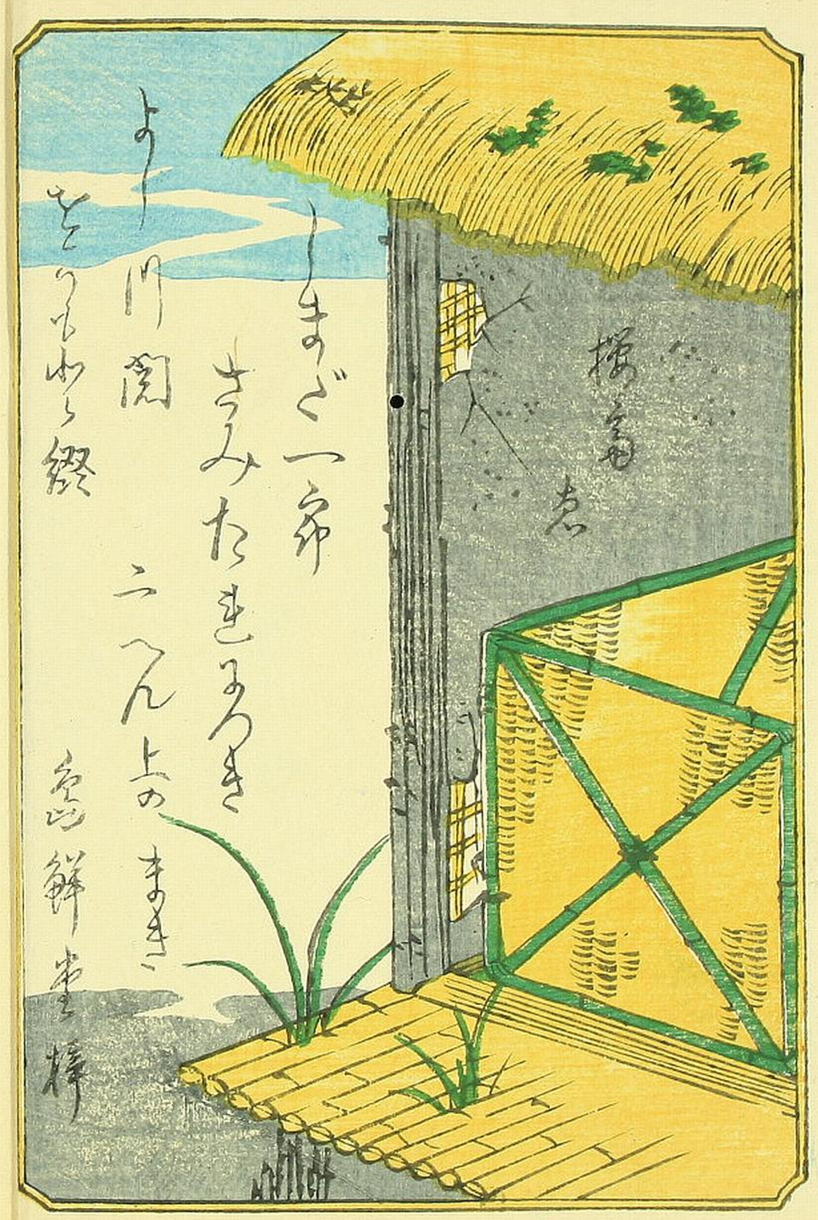
芳川春濤閲
新政優
嶋田一郎梅雨日記
二編上
岡本起泉録
二編中
櫻齋房種画
二編下

芳川春濤閲
新政夏
嶋田一郎梅雨日記
二編上

A469
4



偶一日の休暇を得たれど其頃つづく霖雨に軒の雫のほとくと退屈
まくる時を得ずと雨中たくふも營業の道あり少しも泥濘なき
島鮮堂の主人が乞へるまゝ余も亦梅雨のやむを得ざるより來た
り川の大哥と頼まふ先らけこゝが志まざこゝ元より何
やふ隙あり社我ゆゑ怠惰とゐかゝ時に間ゐ最たる
時候が後れて急立らまてすそれと又も例のだらく急案終り
出しまる梅雨日記も其實ふる物でもいたゞく御意に入うしう
續いて後をと夕立に暫し脊の汗を忘れて再び硯を濡しつ筆の
命毛短夜の燈下ゝこの二編の稿を脱しぬ

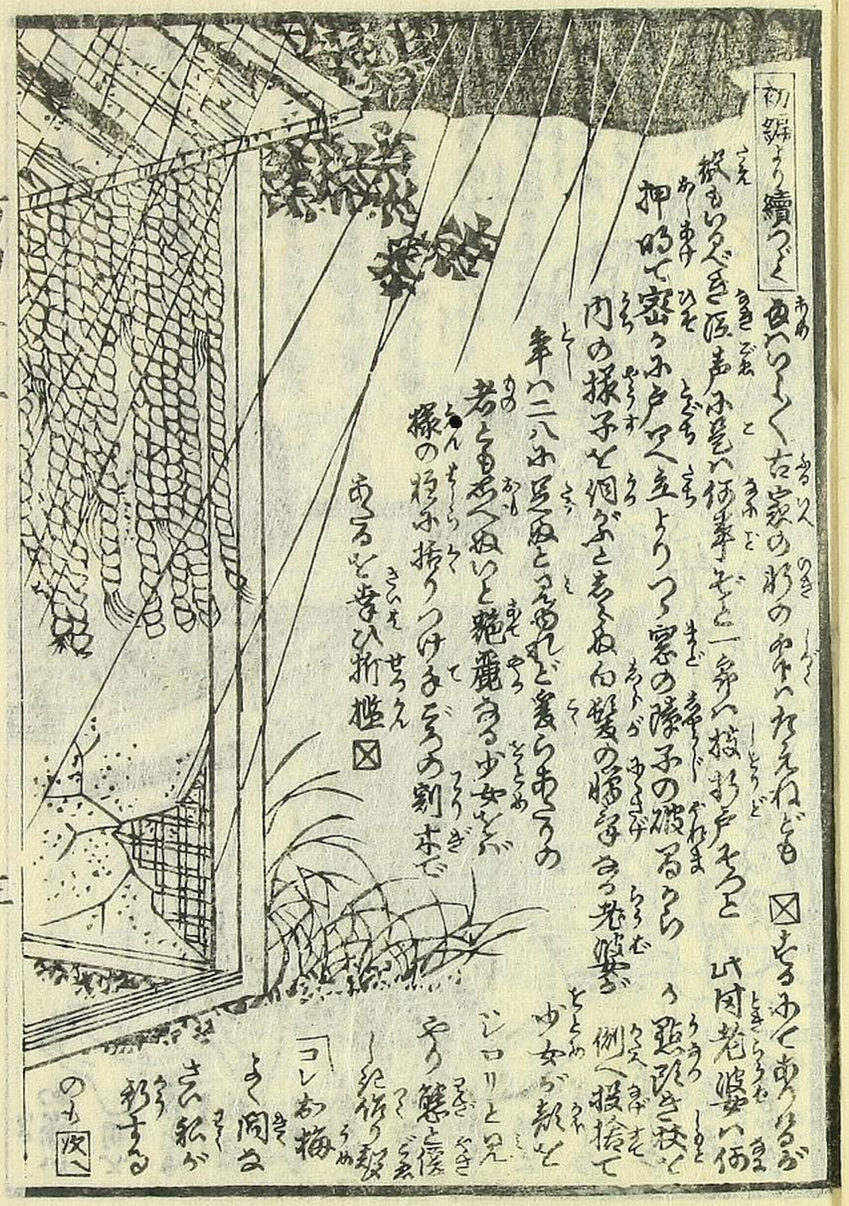
明治十三年八月上旬

岡本起泉

48-8168

森茂道の娘
綾子

阿波の大尽
大竹辰九郎
野毛の悪婆女あいと谷ち



初編より續つゞく

あいらく古家の形のやへたれども ☒ とるあて乗りるが
狐もいろぐきに成声ハ見へ何事ぞと一寸へ抜ぬ戸そと 山内老婆ハ何
押明て密うふ戸口へ立よりつゝ窓の隙ふの破るうら う題ぶき扶と
内の様子を伺ふと考へ髪の婦子ハ老婆 例へ投捨て
年ハ二八ハ見目とうあれど美らあうの 少女ハ新と
考へ面あへ白いと艶麗なる少女ハ シロリと見
嫁の様ハ指りつけまうの別本で やう態と後
ある夜安ハ折柴 ☒ 紀伊の新
「コレハ梅
さ問ム
さ紅ハ
のも 次へ

つゞき

決して和女ら嫌いのぞい
あのが異人らいのの
業らぐでおきもたんとある
あの正形が可愛がらして
絵師ぐるあの業曜をきせ
出世さるのをそをこれ
今をいよ迄もられど
和女へ二人の
親形が
刷れて外
仏像りも

痛い
目を
さまでも
きっと抗疫
出世
さまず
山や
あっ
ぬと
威し
鎌し
麦を
ぞもが

あいのを出意悪が
私が引取てらもモウ
五年ビ矣苦の中でも
和女だけい飢ろ
目や多い

めをさせず去年ら金川へ
ろて魔けば考る玉川の水に考
させ三味線や踊りの絵者古迄も
させ人の服がつく代年代生育で
あげてんいの歌も内掾しやあを
婚の切来とんい祝せずが分られらぐ決
して恵の接ろへせ仮程よサア孫とやく

失とも
強て君と
いふ事ら
尚武上れ

めつき

つぎ 何といひ解く御さえも白墨の
娘の只ぢく 杖を云葉もなく
果しなければ老婆へ寄立ち見ると
とかく事を探ていふのも
昔ぢ強情なる
ドワヤをとかて
一妻と小刀五匹栗弱き
体一小刀行のまゝ折檻
何不と利特もあら縄へ
外を岡へ行ども貴官迎
腕へ付て一面ふ繁又ふ強ぶり目も
あらられぬ有様をなる一帝い事を知
ねど解りといへば道ふき暴き仕打を生紙ふ

◐ 弱こと栗眼と一帝
栗眼

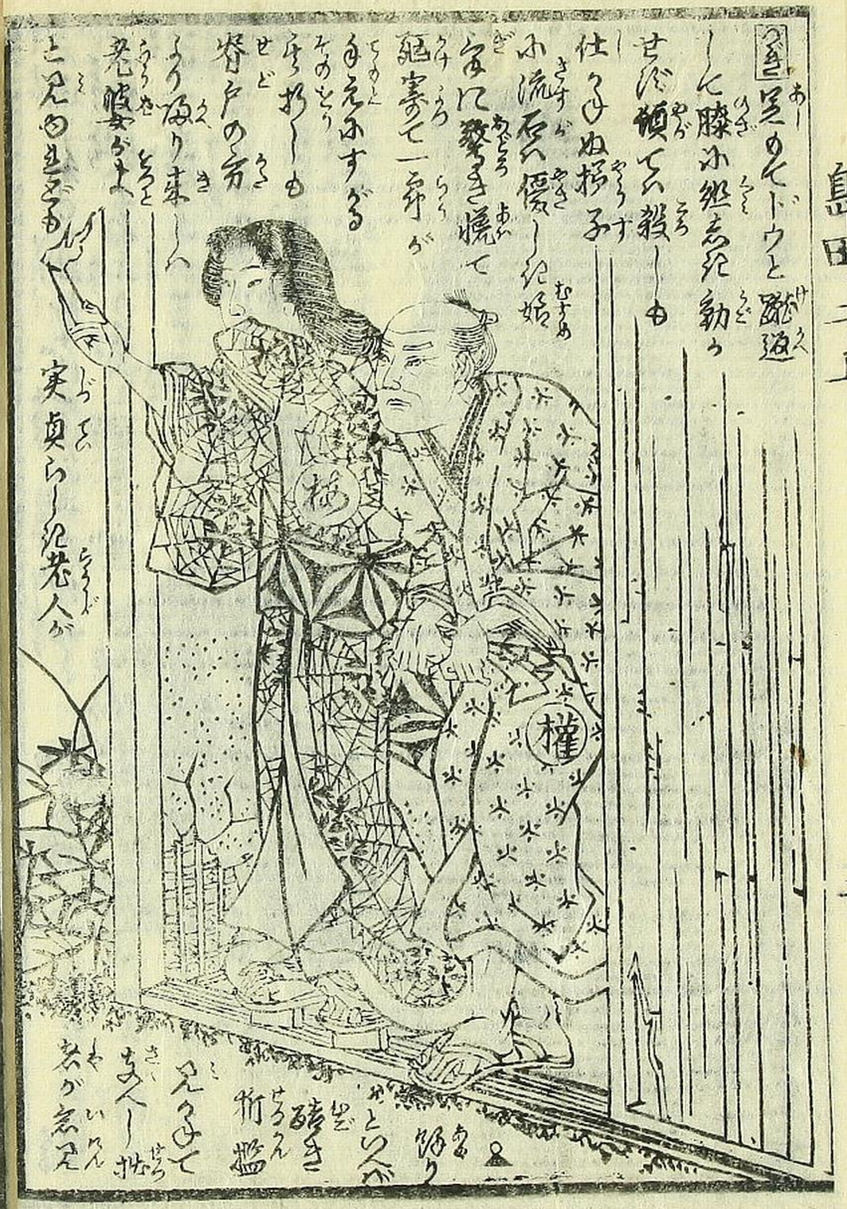
※ハフク
と眼と
已まい
伊那の
散髪好き
の看
板ゝ
知へが
人の
内へ

▲接拶の甘ふ
泥腔で踏んだ

足過しかつて我知らぬ吹方の西戸押明く
実徳内へそれ上り見へと驚ろく老
婆をば怒りふ任せて例へ
投のけ少女が御目を
解き去て云兒帯ふ
狭じ紋帝の中う利
意の
業
と
面
如
少女ふ含ませ労る
内に投られて腰と痛め ▼

▼老
婆ハ御と
起直り ◐ 小刀との紙取りうぶ

ふくもく式婆
えんと痛いあ
ふあのさナ
業へてあろ
返報ハ是ざ
そと倚へに
涙ぬし小刀
と把るよう
ふく突うに
一帝が意ふい
業と脇と
捻あげ離ふく



ふと足るより 革鞋の紐も解ふ
あづく一命が蔵へ
婆こが柄拵ふ
と絞し
ふ向ひ
尚細と
と遍と
輸じ
と絞の事
ふ弱ふ老婆
れしと術身
と嘗と宮
生で倣しめく
拵者が先生今宵
の多れ（老人写し
発されよ兎角ま
ふ毒ふ
ふ毒の事
ねど女子の
車の去ひふ
ふ兎と呂茶
偽る出一命も
今ハ命て
起し紀例（ふ坐せし先
祝爺（前の次第とかく
假令ぬ拵ふる事情がある共
ふ毒ふ
ふ毒の事
ふ毒ふ
ふ毒の事
ふ毒ふ
ふ毒の事

つゞき

お腹中せと身を起し夜天
通りへ出べき路と尋ねさど
して立出ふいとしつゝ出もあり
やがて流れの雲の銀るより
洩れて出る月の新法く樹々の
中小照をひて行方漠
く見るあぞ遠ひも
きまで長き拂
どう緩出へ帰り
つれるい祇園
過るひとして茶
屋より悩もし
病へ愈たれと

○八百屋久兵衛
栄の姫
お辰方
ゆて
父久
べお
嘉
八
疾く
ふ浜
し般
新濱
へ出入
屋安ゆ

戻りの遅きに
心を悩せ臥
らゞ待ー淡弟
へあり次弟を、
藤もあく語り
あゞ叩家さ
へり型彩い
早く両人
あて港内の
寄ぐ臣石と
見物ー尚
委ぐしくい
後日の

と事みせんと貢過るゝ糸糸通ひの
流私弘明丸小栄迎んで糸に忘て
見せ出い義て一弟ハ管
育の長ゆあり

ふゝ弟ハ
ゆ級さあるなゝゝ丁目の

一方ゆ

稼業と人
今ハ回布に
旅人ゆと
管ゆ

ハ義て仮
ア小家
国事
れ
む

次へ

◐雲の峰樹々も新びて
涼い氣ふと雅とてにとあく
毎ふ熱しくと
いふまぐれ
角田
赤い
例もの如く
二人連
ぐち
高を
出で納涼ぐちの
運動ふ後書の著を
散歩の序で陽湯天祢の焼肉ふ

ありさまを書てふ
出家せ〜少
便宜ふ
二人ハ暫しと
昭象ふ
寄留て
陽湯の或る潔学
先生の塾へ
通ひ頻りに
学文ふ剣
若しそれ二年の
星霜を経る夏の来
冨士も衣を脱ぎ捨てよう
しい衣ふ入りていで給ふ
生中に矢物や茶店
の女等が
茶店ふ扶九ふ腰うちかけ
次へ

甲
乙
小

東京區分繪圖 全

鹿兒島紀事 六冊 切

命之養生善惡鏡 全

獸類一覽かるた

其名も高橋毒婦の小傳 東京奇聞 三冊 貳 七扁大尾

島田一郎梅雨日記 上中下入 三扁袋切

御所櫻梅松錄 十五編

流優忠臣藏折本

大功記銘々傳 四冊

新板双六類品々

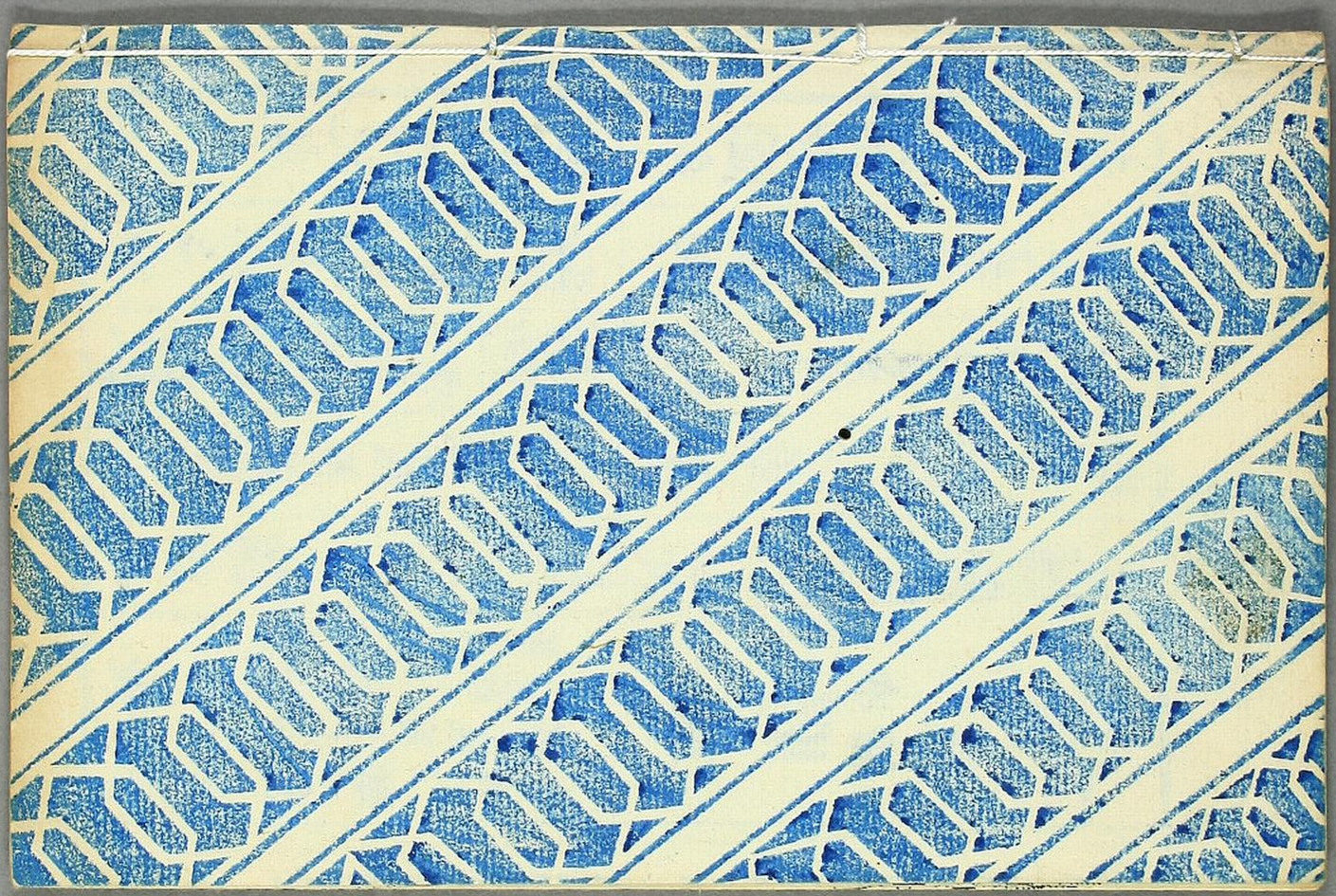
亀地錦繪問屋

本

編輯人 岡本勘造 浅草區瓦町十三番地

出板人 綱島亀吉

010190511087



岡本起泉綴
二編中

A469
5

48-8169

三編中の巻

いろが中ゆも
妻やど世ふまぢ紀ゆい恋い恋い
色紙ふ添寄の蓋ふさえ
ア女も新りも世ふ人中へ
妻られ廓のう紀勤売の
内の家苦労い眠る日新
を逆あさられてみの供や
逆事さえ恋い廓下の形
通ひ間夫のま引や合場の
てもん家と紀猪裏の足ふ出て遣
ふ抓られ叩うう手を苦を脱て潜と
伺れの門ふう樫者もさえを想も
嘘ま恋けば今い隔も憂の夜の月の

洋書
日本外史
郎
弧ひと
面をそ
むけて
資う
そ弘
あの
門附
を見に
つみ
つぎ

つゞき
迫されぐちは私の身の
不安しいやつ又あせーと殺し
ますが武士と百姓をかけて下さいと殺
ありがとと捨あげてやる
が図い今宵の仕義も
いろそも伊勢山で半年の
あ義で雅義とのがれさ
ぬ様しさと忘れるびとそ思ひ出ぐまず
いろう紙一枚お目ふかりて一云のあれ
まで老ひのたけとはしでの神ふ祈
ほし甲斐あり七年ぶらば新夜魚
十ぐおえあげやしこ生ふ図
一郎
◐解説
しんぞ
出
▲婚
田左
衛門
▲
あの妻
出い二人ぶ
中を結ぶ
拙りく侯ぬど

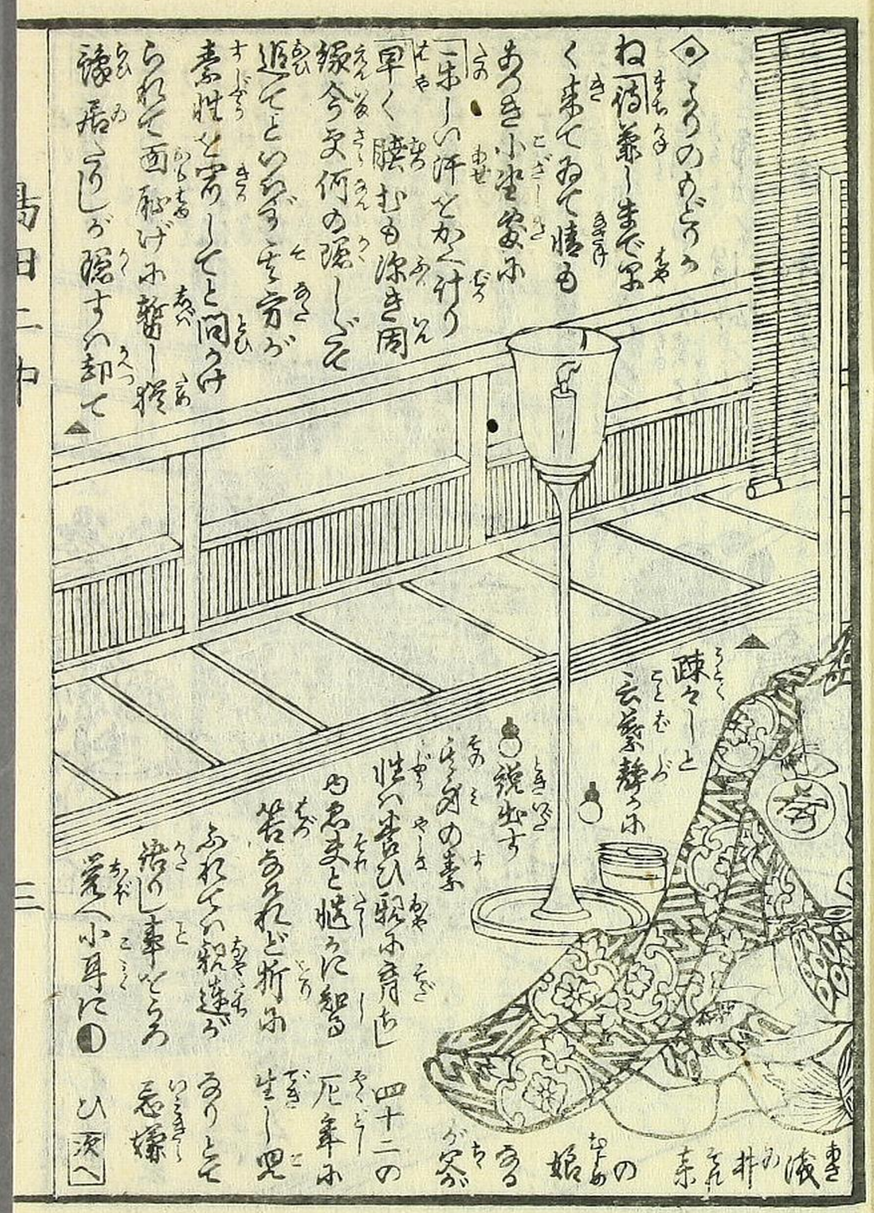
図花三月ふ為ひ
しぶ女運の方の
花もあれば帳場の筆と雅合の
文ふいはして袖ろく徒とふ男が
引取て入るさを拙者ふ也も知ら
ず翌朝フツと袖と探りるに◐
小
綿竹のお美と
ぐ白紙小きり
出さ人拙ぎつぶ注夜
も切言
文体
ふ拙
白不
例さ
お遇とぐべ一文い市めて
出ーそえんと人ふも出ぶ
只獲りみの去業と侍り
たと今日夕方ふ山切通
しの獲面へ刀出の
八武人

つゞき

あるうらぐちと袴の紙捻

◇の

◇



◇そのめどうろ

ね羽兼し生で宗く来てあて情もあつき小生安ふ

「宗しい汗とかく行り

「早く腰むも涼き周

縁今文何の涼しぐそ

返てといぶず生方ぶ

素性と宗しとと同ふ

られて面和げふ暫し指

後居宗しぶ涼すの却て

疎々しと云繁静ふ

絞出す

性の素

性の素

四志文と性ふに智

若ふれど折ふ

ふれて和逢ぶ

絞り事とろ

羅人小耳に

四十二の

厄年ふ

生し思

ありとそ

恋嫌

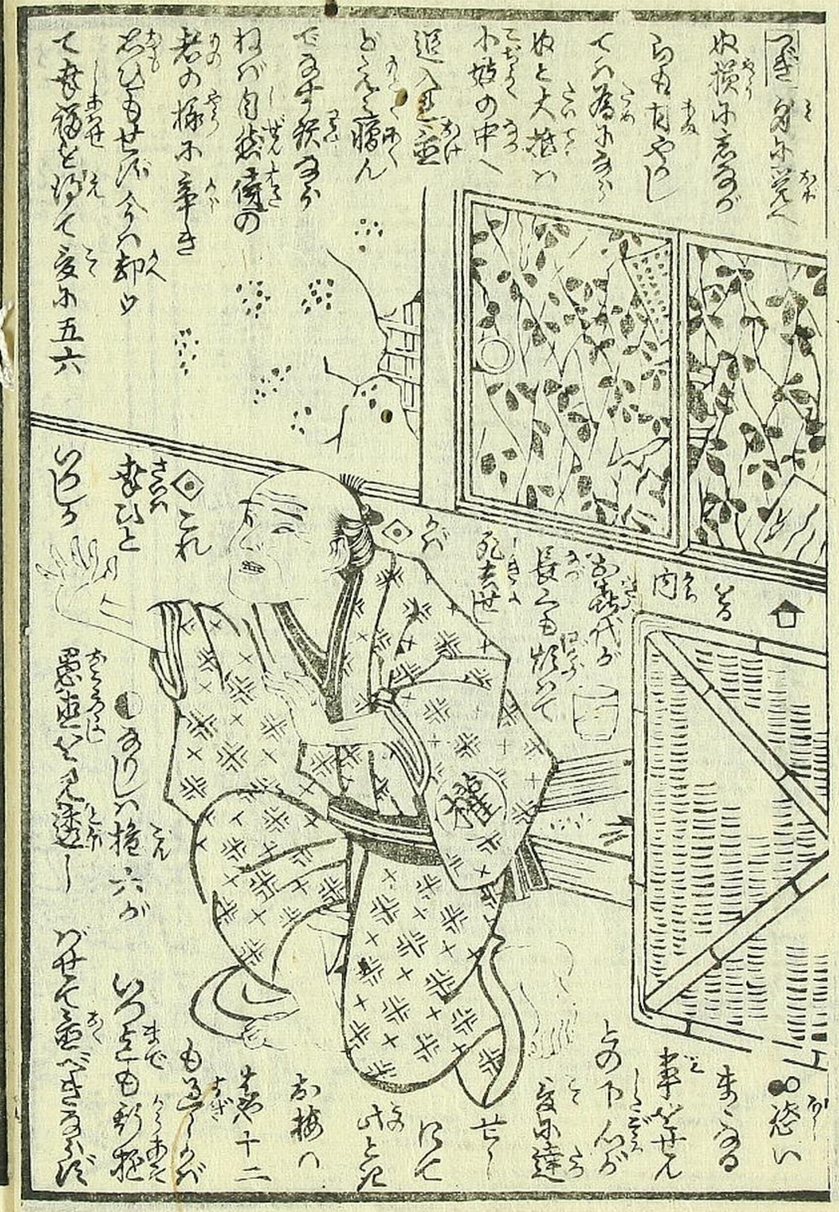
ひ次へ

浮世

ぐうたらの
ぶくろう
さそ
こ味

踊

すこし
の猿繰き
ある神あふ川町
巴屋とゆふ女郎
屋の座ひ
おたと尋ねしゆ
女戸をあ梅とゆて
嬢ゆふ
嬢ゆふ
愛くしとゆふよ
の稚六ゆわ
何のゆ
かの金をゆふて又も
ぜあて同家の
別深に
本町の
表
従是下四丁の
梅吉が一郎への物語
と見たまへ
女戸をゆ実の
育てあげ



つぎは
鎮三郎
せゝ一如邦
角金丸
の内義兵
お豊とゆ
をたのゝ
元人金八
血を絞
さんぐ慰ん
ぐ人ゆ生
豊
梅

家内の
口減しゝ
乃地妓国揚
遣ひ
弱合ふ
横六ハお
と共に
保郷
乃の一郎
家へ引
恵角
の年
の金にせんりのと生向ひを探す
たるゆうト
横浜長谷化の
次へ

つき　那時半郎の四郎て一時苦痛い逃まてかきらめ却いて悔しこと嘆し

※吸いつ喫ホ釈爺い毒ホ死ぬ

起即ちても自由でうつく伯母い

さうくんとんる貴若ホあ寿うと

何処へ行方が知れぬと

業ト云して居らしに伯母い半郎に強く投られて腰のお撲ホ悩こ

後たうにはきて

起ものぶ涙ホ流き）放安ひ

ぶい一体どうして仮ぶ

して折檻と逃まて嬉しいとい

まもてうと猪りの間つの

顔来て安終りて一年が

ふ沢爺が看病の為稼業

ふ如何の毎日の事ホ

を例ふる間の苦さ

まるが逃て仔細も判ら

でおろ伝いとも知れ

ぶ角いとこ拙き苦こ

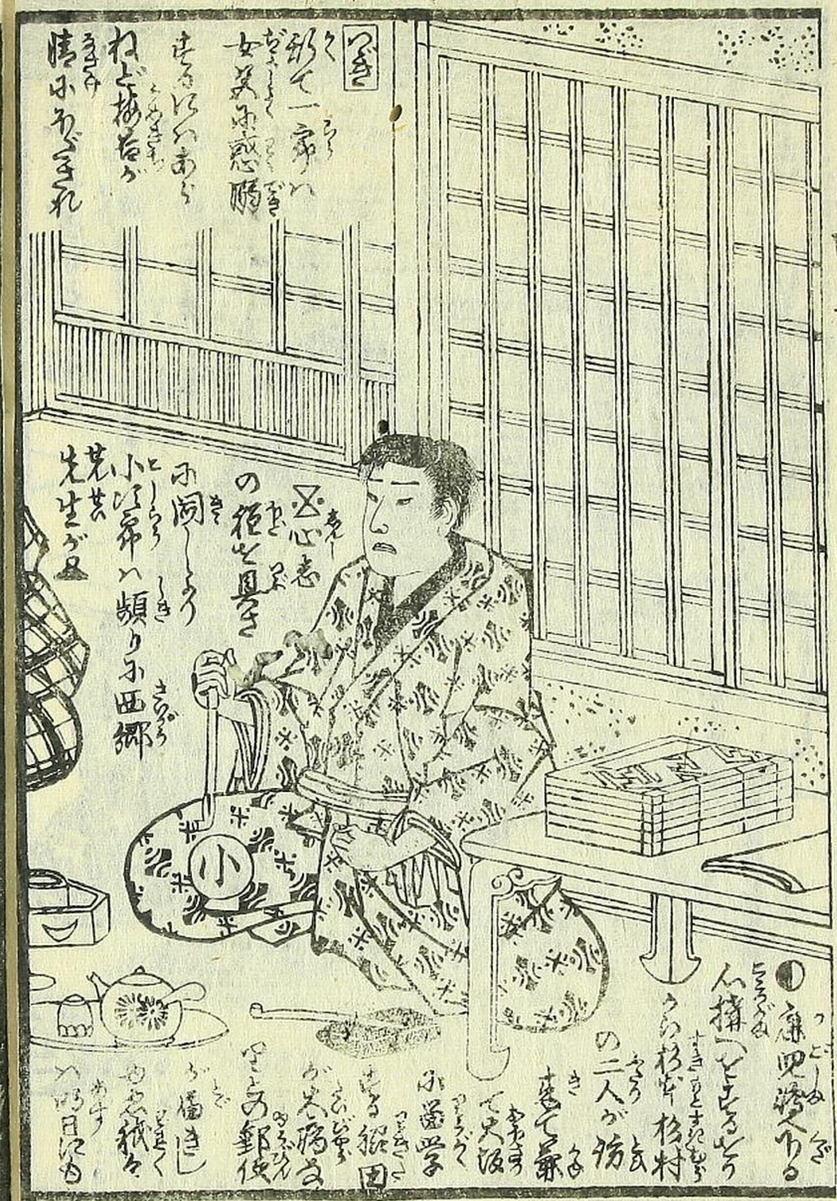
仮こ知ものまと巻ふ

自分も足袋の長男ホ

ものを思ふ私が此方へ抱へられ借こ

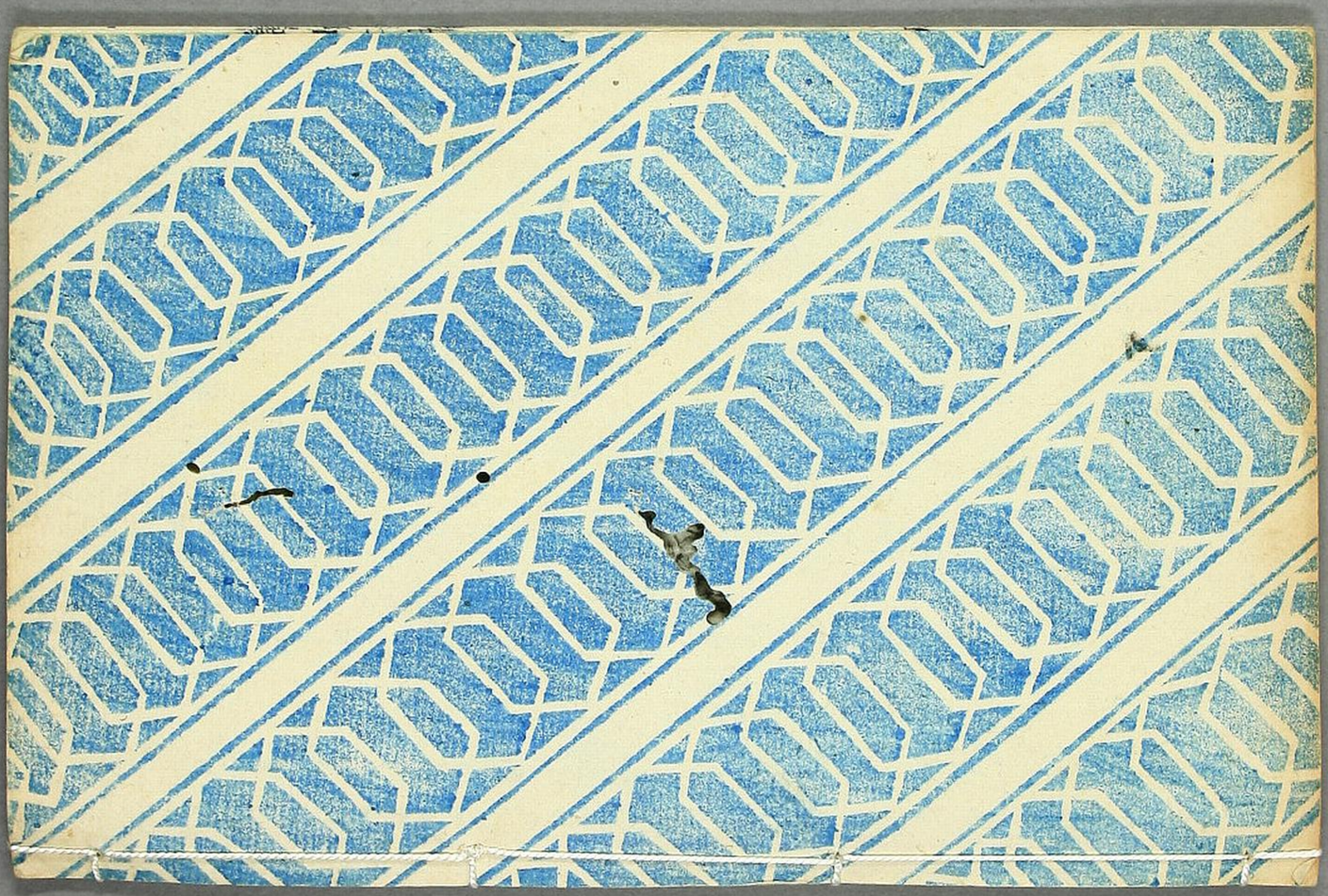
お金を受取て※

次へ


つゞき
小

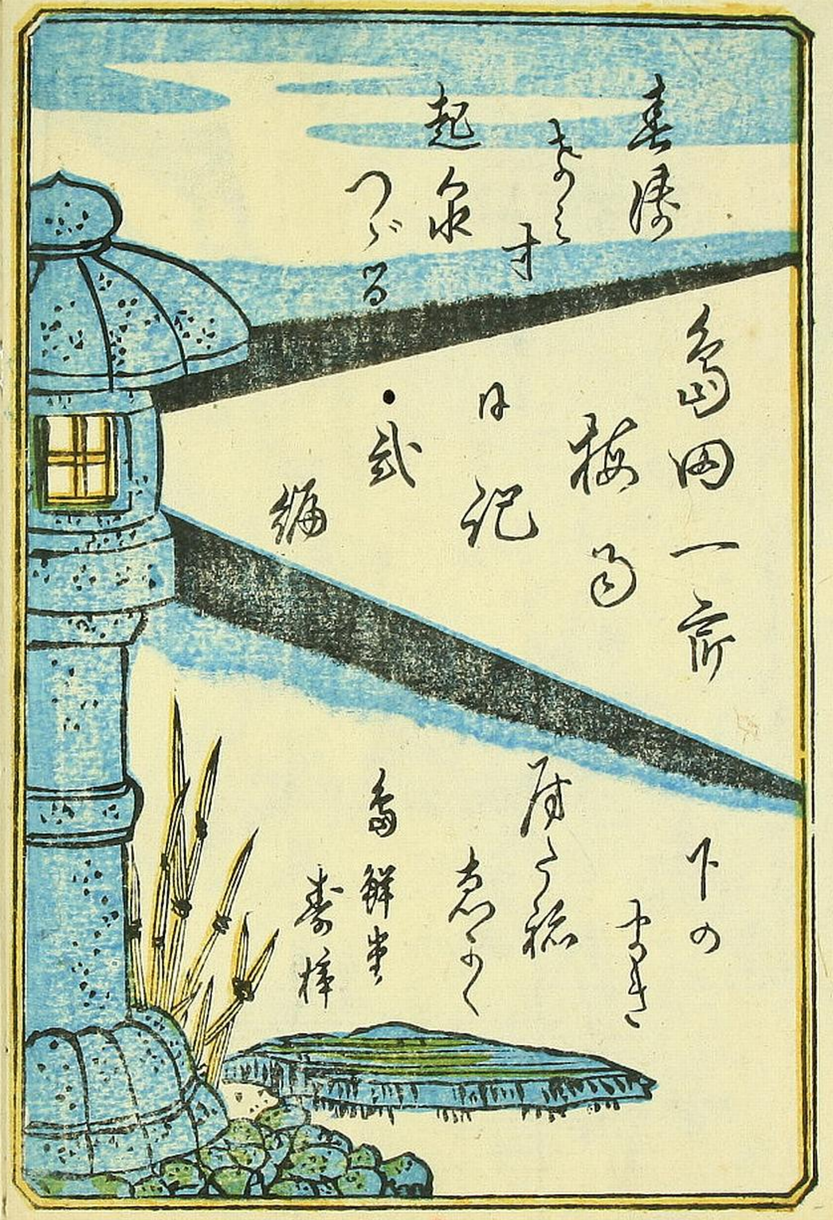
文

東京區分繪圖全
命之養生善惡鏡全
其名も高橋毒婦の小傳 東京奇聞 三冊 七編
島田一郎梅雨日記 上中下入 三編
鹿兒島紀事 六冊 切
御所櫻梅松錄 十五編
獣類一覽かるた
大功記錄々傳 四冊
紙優忠臣藏折本
新板双六類品々
亀地錦繪問屋
本勘造
編輯人 岡本勘造
出版人 綱島亀吉
010190511095



櫻齋房種画
大竹
二編下

A469
6



48-8170

○若き時は之を戒しむる色ふかうして宜うるを愛ふ
一夢は肉身の只茅も及び取程ふ紀しく世ふ法布に

忘
嫌道も
梅若と
いと老ぶ
如来し

友垣もあり
まる事とあり今後小法布等ぶ遊塾ふ面強さ臣ゼ仏地

○十八史畧

つぎ　ようこそ
ゐらはねど自分い
友達の家をも
ゐの孫ふ君の為
ゐら百年の人下
も伺
う猫さんと
切ゐる梅吉
が仙ふ翁
きゐのう
事のお云
ゐらねべふ
江帝ふが

▼家へ見えとの不自拍を保入
子を粧をおき友達の用維
を拵入て粧ひらべ家へ我
子も同学に
ちひゐる業
牧見を家へ
美天も世が
一向ふ用ゐる
糸天ゐき
と嘆き影
ふ今友へ
自分ゐ達
方ふ見弥々

そそぐ為しい加ゐて
目の上の瘤と私ひ
ひ地ゐてまゐへ猫
保ゐ花ゐ通ひ源
ゐゐもく意の図
ゐゐ家

少し と変ゐ
入事ゐ
知事れ と一帝へえゐ
梅吉と
門そゐ
方向ゐ
雲を

ゐ毎ふ何経ゐ
ゐれべふ
ゐ
ゐ
ゐ

つゞき　容易世話に出来ぬ云れて兄弟姉妹方ゝ然へ
去ども邪魔ハ出ぬ引ぬ二人の者へ切もそ
どの様ハ不量見も起しやせん云ゝ
深淵大事の場合牧伯ハ病ぬせんものと不逢
三組町の隠しげる豪ふ乱り例もの通り
密ふ梅若と呼出さ世ふ此ハ久しく通
ひ路の恋をさろしと事ハ柄ハ
梅若ハ傍の手前もうね合の無沢
そ尾して涙と人目の関を
小働のもく
義へ入事
と云れハ尚
夫胆迫り

早う帰して下さんせ
と伝ゝ手を合せしく
一家ハ彩々云々の深ふれ
べ来ハ兎も角者ふ
わべハ一家ハ生活と偽る
牧ふ爲の
面と可状て
と云事を
偽せべ
きに者
さへ活と
を
迫

伯と奉する
云ふさ嘆
人目義不
伯やと涙ふ
伯細とハ
涙ふ岩手の
紅葉ふ色に
出る風情を
見そとる梅
若ハ拍を
痛め眉打
ひそめて猿
ぢりとせ

ひろう
心配ふあり
さろる新
色なを
撫ぢこ

梅若の外ハ
つろびれず
変貌を不
伯やろ人に
ハ
の為とあるふ伯で
雪こい以来世ろ
芦切でハ折角苦労
ハ

つゞき 強面しいろに郎ふねどの幸
系いからび素み幸ゆと
宮あてトさる
ふいつゞいつと
でも待てとろ手すと
帝手ぶ仲と立通手羽
ふいとで可愛之宿し如
やせんと狂様しが
ゆて出果しと乳
を取出し涙ふいからび
夫婦をといふ紙とを懐中続の
蓋と身を立ひて取度」祐幸ふ
切みを書分て為も

拾ひとうけ樽や番
しのふれふ見も又
命とろ和著かつら
雑色が宮紀風接ま
しが一年八家と厨は一を切
みを懐中し急ぎ旅宿へ
立返りふ辰へと
せて呂著ふ用
旋の狂を彩しまふ

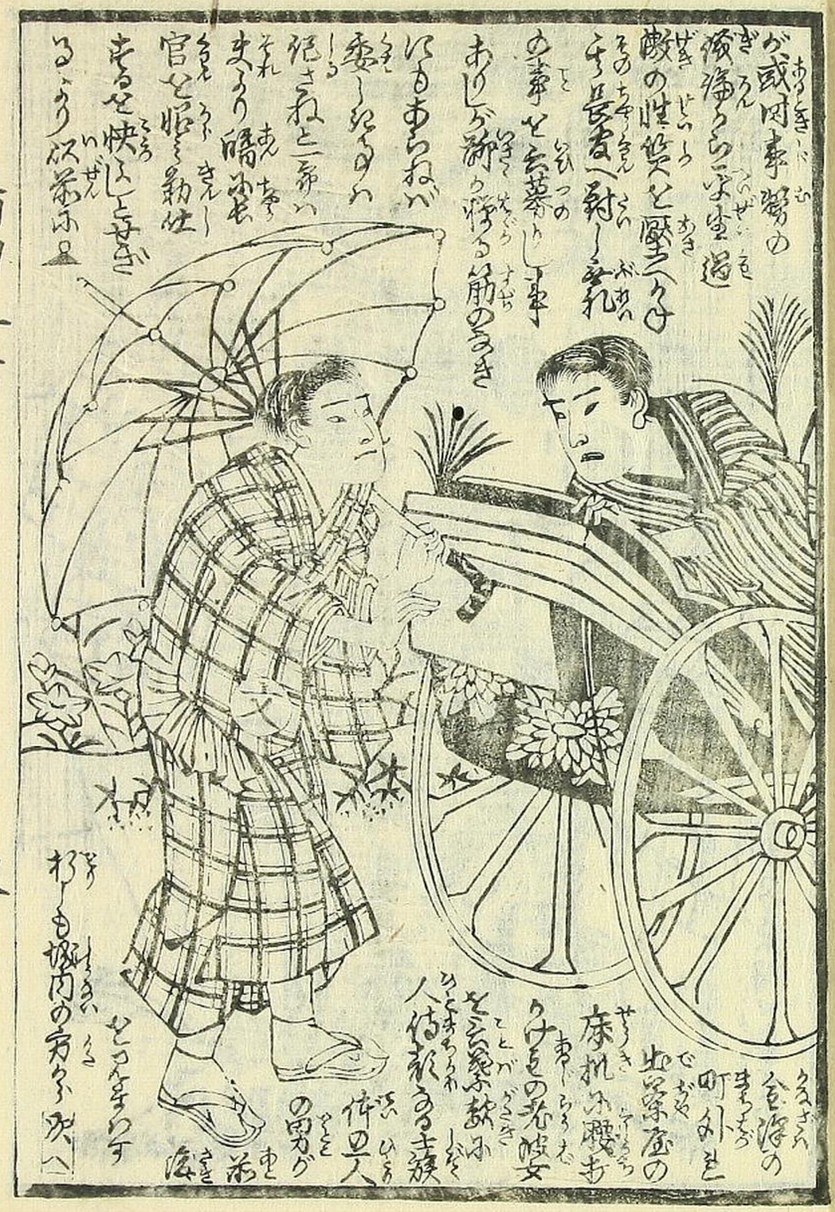
長官

お食も地し
楽ん一筆て自ろろふ
久しく下南」て宮」宮紙線の或人ぶ今八相意の
官真とろを祝く出入をたるのろら つゞき

つぎ さる夢を
ろくでなし 又茶を
の粉にふるひ
早く登庸
されば或
肖の
出仕ふ猶

せられし一ぶ
へ枯魚の水を
ゆるが如くふ
れたる十分に精勤
せし給ふ間もなく冥答も
一同中の評判もよろし

▲引き入れ不勤なる放伝こなく不平尾ふ
の嫉妬もなく仏目ふて廉児偽婦へ
ふ張と命ぜられ邑
うばの意ひの事
ようとて
一く又後も
をしくふ拙者
方へ内こふて生育仕連
ちきふ張ふ脚を歩げ
て急き
廉児猫へ
とをを抵きらき
○さふ加州



が或内事勢の
後海ふ二字金遍
敵の性質を壓ふ人
ふ長者へ対し乳
の事を云葵り事
あり心が新ふ浮る筋のふき
けもあらねば
委しふ知ふ
紀されと一家い
ふより晴雲
官を賜ふ勅仕
するを快ふとなぎ
るふり仕業ふ

久さん金海の
町外を
出家座の
疎れふ嫌ふ
けもの者婆安
を云繁ふ故ふ
人情新る主族
仲四人
の男ガ
茶海

とこんをつす
ずも城内の方ろ次へ

つゞき

来かゝる年の
比二十ゆるらぬ冨士額
陳目立女子とゝるとう
眼たゞしく走り出で
「モシ錢子さんお一人
で何処へ行くの
られて立止り「オヤ
者ぶい杉村さん先達て杉
おさんや服田さんと四一所ふかゞり
にあつこゆいあまりまして
お目出度と「長きく
そろこつ指でお出ゆみ
嫁姻る迎新と拜ーこと
安ひ物こお年ふ入てこもこの
義ものどぎまびたて此方へ
ことを
おふ
奏
ま
て
「さて不生ぎ
さてふ服の義でぎ
ぬ者嬢とうて
かぎせ
上
る庶机ふ腰と

つゞき

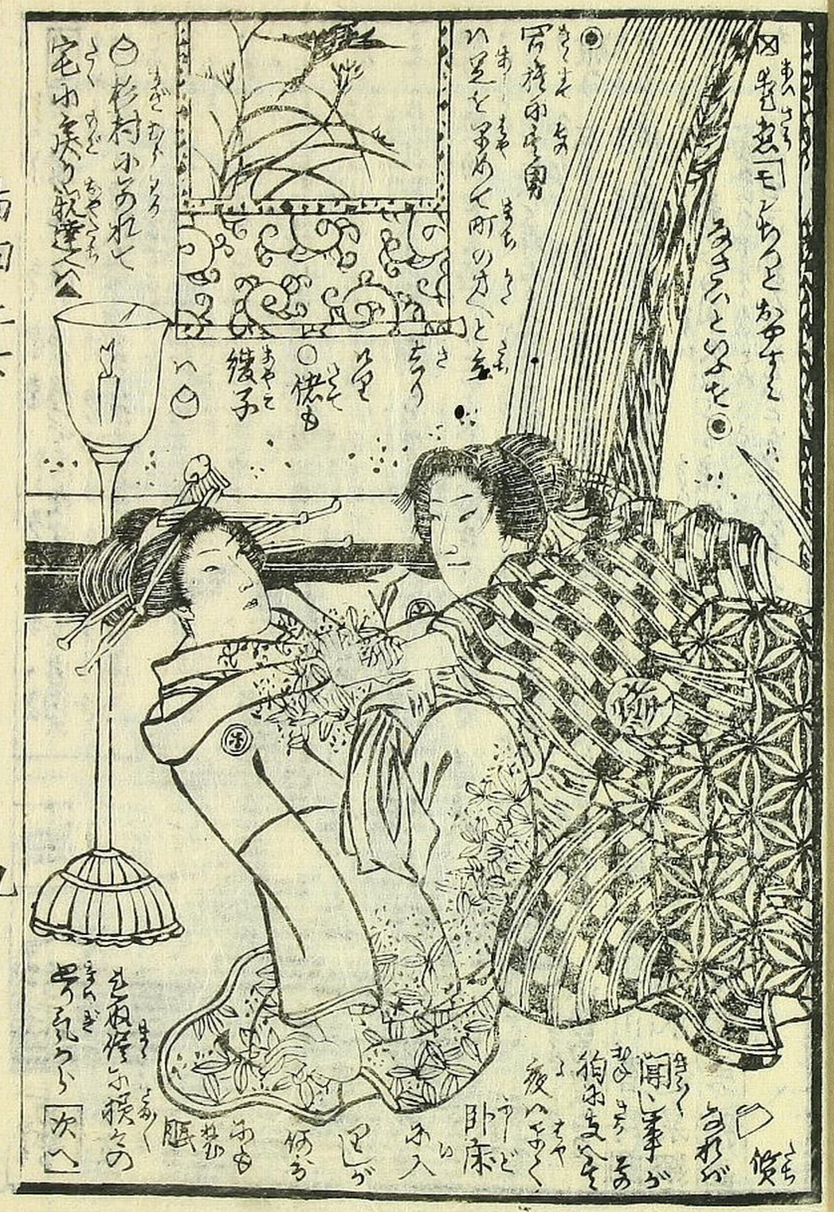
誠約級と申紀元ありあるさ山本君が
柱暦上の名あ鹿児島一番ら れたと過ぎ
山本の名花父（偽名也）著編も
屋けら那いさ赤白偽ろ
海ふ子ち処ある一つの
涙汁さて
その
虚
の度
をぐうと引っ張ると申
さうあふさ山本君（大阪新聞の
小説とふ廣告の物語でて何ら
オンレくハンカチでいあの花冠光とつあて
ぎる涙ぐめ何ふ感慨

◐恨とを考ふ脾色い故ぐぎると宮で宿接家
て女の涙ぐ面ふ入ろる笑ふ
たりと花ろ西かふかくと乳と
探せるあろに
吸ーみる
お綾ふい
家に長徳寺う
ず去ふかなふ
行ふ云は袖と
拾つて行
祭杉村
い実布と
行笑ふ考ふ
下駄へい

長靴とちゃッポンとはまり帽子も冠れるッ
ちゃつ夜とステッキ白逆上方でマンテルのそ
ゐい品量えとふれさ波我くも再ふを患若も
ふくぶ兎のもあども尚入ぶ自ゐのぐ保義ふく
お接ぐ顧えず帰省とふぐぶ恵代事ぐ教へ
とい海たれどまでい朋友の張値ふ戻れば止ゐるず
敬ーとぐる
山本君の

心と失敗ふぐぶ拙者の業
意ぐ内々ふ郷ふせ中ふ
失敗のふふふ仮ふく
ぶしてい云れうんぐと後日に
どう出
ふく接ぐ
とふふふ
小説と
実布
一輝
ありげ
ふ大
の男
が次人

[ア書] 夢り[illegible]を拭ひ取り
[illegible]ら「先生[illegible]」
[illegible]切形ぐ[illegible]声が[illegible]
[illegible]日外已上山でい[illegible]で合様い
[illegible]て[illegible]ひ私も大傷をうけて
[illegible]からぐ[illegible]目ゐ[illegible]さぶ[illegible]
[illegible]郷[illegible]
[illegible]も那[illegible]失敗[illegible]
[illegible]服田が[illegible]
[illegible]
[illegible]



東京區分繪圖全
鹿兒島紀事 六冊 よろづ切
命之養生善惡鏡全
獣類一覽かるた
其名も高搗 妻婦の小傳 東京奇聞 三冊製 七扁奏
島田一郎梅雨日記 上中下人 三扁袋切
御所櫻梅松錄 十五編
仇優忠臣藏折本
大功記錄々傳 四冊
新板双六類品々
龜錦繪 地本 問屋
編輯人 岡本勘造
出版人 綱島亀吉
神田区一番丁廿七番地
浅草區瓦町十三番地
010190511109

芳川夷濤閲
岡本起泉撰
桜亭春種画
島鮮堂壽梓
島鮮堂
志まだ一郎
たゞ色は花
茅武編